

# 大津波再来の恐れ09年に指摘

津波に襲われた東京電力福島第1原発について、津波の専門家が2009年、原発の耐震安全性を検討する経済産業省の審議会の席上、東北方に大津波をもたらした869年の「貞観地震」（マグニチュード8・4と推定）に触れ、同規模以上の津波再来の可能性について指摘していたことが分かりました。東電側は「歴史上の地震で、耐震設計上考慮する地震にならない」と述べ、指摘は反映されませんでした。

指摘したのは、産業技術総合研究所の岡村行信活断層研究センター長（地質学）。岡村さんは、史料に津波被害の記録が残る貞観地震について研究。福島第1、第2原発の敷地付近を含め、内陸部に津波で運ばれた砂が堆積していることや、450～800年周期で津波が起きたことなどを明らかにしてきました。

## 東電、津波想定に反映せず 審議会「1100年前の地震 考慮の対象外」

岡村さんは、09年6月に開かれた経産省の審議会で、福島原発について貞観地震の知見から「津波に関しては（東電の想定する地震と）比べものにならない非常にでかいものがくる」と指摘。「まったく触れられていないのはおかしい」と再検討を求めました。しかし、東電側は「被害がそれほど見当たらない。歴史上の地震であり、研究では課題として捉えるべきだが、設計上考慮する地震にならない」と答え、消極的な姿勢を示しました。

翌7月の審議会でも、岡村さんは04年のスマトラ沖地震などに触れ、今回の地震のように複数の震源域が同時に動く運動型地震の危険性を指摘しましたが、東電側は「引き続き検討を進める」と述べるにとどまりました。

東電の武藤栄副社長は25日の会見で「一部の研究者から論文が出されたが、福島沿岸の津波の形跡については統一見解はなかった」と釈明。岡村さんは「もう少し前向きに検討してくれたらよかった。そのことは東電が今、身に染みて感じていると思う」と話しました。

**貞観地震** 平安時代の869年（貞観11年）に東北方太平洋沿岸で起きた大地震。901年に編さんされた史書『日本三代実録』に、現在の宮城県多賀城市付近で城などが倒壊、津波により1000人が水死したなどの記述があります。海の砂など津波堆積物の分布調査などから、同県石巻市から福島県中部沿岸では当時の海岸線から1・5程度まで津波が及んだとみられ、推定される地震の規模は最大でマグニチュード8・4程度。